

Title	熱河地名傳説
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.2 (1935. 8) ,p.94(276)- 94(276)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350800-0094

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

熱河地名傳說

昔堯の時天に十日が現れ、羿がその九日を射落した。その一日が今の北平の北昌平州に落下し温泉をつくつた。明人之を温泉と呼び、温泉行宮をつくつたが清乾隆の代に溫郡王の爵を避けて熱河と改めたと云ふ。以上の傳説は「群書參考」と云ふ安南本から摘録した。此本は明命壬辰（一八三二）の作で著者は翰林院侍講學士范先生とある。上下二篇に分れ、漢籍安南書より種々故事來歴を抄録した一種の百科全書的作物である。河内極東學院所藏寫本、番號はA四八七。

射日

按射日之說、載於外紀、世儒林氏斥之是矣。考之傳記、堯時后羿所射之九日、落地皆成溫泉、一在燕京之北昌平州、明人稱爲溫泉、建溫泉行宮、清高宗乾隆間、避暑叔溫郡王之爵、改熱河、今邦交所稱熱河行宮、明人宮怨詩云、可憐一脈溶夕水、不爲人間洗冷腸者是也、其一在長安之南驪山、西漢稱爲陽泉、唐人稱爲溫泉、爲之建華清宮、白樂天長恨歌所言、春寒賜浴華清池、溫泉水滑洗凝脂者是也、其一在西域、唐三藏遇蜘蛛女妖干此是也、其一本國符籙縣西山四政酒坊、其下流爲溪渚熾入海者是也、凡溫泉初出、熱如滾湯、可以燂鷄、稍遠則溫和可浴、至三四里、狺與冷不同、漢唐之溫泉、明清之溫泉、皆甃石爲池、鑿龍首以噴水、爲鄉浴之所、其余支派、各有池館、以供妃嬪侍從之浴焉、地志言凡地產硫黃者、必出溫泉、蓋純陽之氣所鐘也、堯時后羿善射、其妻爲姮娥奔月宮、與夏辰有窮國君后羿其妻爲寒浞所烝者、名同而寔異、相去一百三十九年蓋二人也。